

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530166

研究課題名(和文)近代国際関係と地域システム変容の研究・東アジアを中心に

研究課題名(英文)A Reserch on Modern International Relations and the Transition of Regional System;
the Case of East Asia

研究代表者

平野 聡 (HIRANO, Satoshi)

東京大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：00361460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：冷戦の崩壊とグローバリズムによって特徴づけられるここ四半世紀、新興国の台頭と従来の先進国の国力低下があらわとなった。のみならず、台頭した国々は、既に普遍・所与のものと思われた近代国際法に基づく秩序に対し、必ずしも積極的な態度をとらないという現実がある。現代世界はまさに、多元化・多極化の中で様々な秩序観・規範意識が交錯した状態であり、とりわけ東アジア地域はその現実が顕在化している。本研究はこのような問題意識のもと、比較政治・法制史的方法から歴史と現在を通観して、東アジアという地域における秩序の特徴とその近代史における曲折の実像を明らかにし、世界史の再構築と共存に向けた知見を示した。

研究成果の概要(英文)： This quarter of a century is characterized by the collapse of the Cold War and Globalism, then the power balance between the developed countries and the newly rising countries has changed greatly. At the same time, these rising countries have their own concepts of regional or global order, do not eager to accept the reality of modern international law and the international order that is based on Western history and diplomacy. The present world is just in the situation of multipolar or diversity, various image of order and norm are complicated, especially in East Asia. This research stand on such concept, using the method of comparative politics and the history of international law, revealed the character of the order in East Asia and its historical transition, then showed the concepts for re-imaging of global history and co-existence of civilizations.

研究分野：アジア政治外交史

キーワード：東アジア 政治外交史 政治思想史 国際法 比較地域研究 地域秩序 近代文明 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

本研究の問題意識を簡明に要約するとすれば、21世紀の多極化世界における西洋近代的秩序認識の行方を、東アジアの視点・状況を中心に、比較の視座から考える、ということである。

冷戦の崩壊やグローバリズムの席卷により、新興国の台頭と従来の先進国の国力低下があらわとなった中、これまで世界を大まかな部分で規定してきた西洋近代的な秩序のあり方は果たして変容するのか。あるいは新興国の台頭や多極化の趨勢とは別に、西洋近代的な秩序は地域それぞれの歴史・社会・文化と反応してそれなりに影響力を持続させるのか。さらに、そのような変容と持続、あるいは歴史的連続と非連続は、歴史を認識する枠組みそのものの改変を迫るかも知れない、といった状況が顕在化しつつあった。

そこでとりわけ大きな論点として浮上したのが、既存の近代国際法秩序の持続可能性である。近現代の国際関係に参与する各国は、一見すると国際法に基づく外交関係を採用しているにもかかわらず、実際にはその結果生まれた関係そのものに対して違和感や反発を感じていることが少なくない。

とはいえ、安易に近代国際法の拡大に至る歴史と、その結果各国内に生じた諸々の矛盾を批判し、打破すれば良いのかといえ、決してそうではなからう。国際法に則った外交と内政を各国それぞれが実践することによって、当初は西洋で発生した近代国際法秩序は国際公共財となったからである。

それにもかかわらず、歴史・世界像そのものは、現実の実務とは離れて、国ごとに異なる文脈のもとで解釈される。その結果、現実にはそれなりに機能している関係を悪化させる原因になるし、あるいは既存の近代国際法や多国間協力の秩序にくさびを打ち込んで、「より長い伝統を踏まえた、真に理想的な」秩序を造ろうとする動きが起こる。例えば中国の急速な台頭、あるいは米国の相対的な退潮といった流れの中で、このような歴史的感情を踏まえ、近代国際法秩序とは異なる文脈の秩序形成を試みる動きが顕在化している。

そこで本研究は、このような現実をより客観的・整合的にとらえるにはどうすれば良いのかという問題意識から出発し、とりわけ東アジアの海域を取りまく国際関係を主な対象として、世界の様々な文化圏の事例をも比較の視座に置くことにより、近代国際関係・国際法秩序と伝統的な自意識・地域秩序の摩擦の発生原因と緩和策を探るべく、研究体制を整えることにした。

2. 研究の目的

既に前節で述べた問題意識を、さらに研究テーマに即したかたちで詳述したい。

西洋諸国が富を求めてアジアに進出し、やがて実力を以て植民地化を断行し、あるいは対等な国家間関係の設定を行ったほか、例え

ば日本に代表されるような一部の国は、生き残りをかけていち早く非西洋国家でありながら近代主権国家システムを採り入れた。その結果、19世紀には西洋近代的な国家主権の概念が広くアジア諸地域を覆い尽くした。同時に、従来の自己完結的な地域システムは激しく揺さぶられ、解体または大きな変容を迫られることになった。

今日東アジアと呼ばれる地域において、かつて伝統的に作用していた地域システムは、研究史上総じて「中華世界システム」と呼ばれる。その基本的な特徴は、東アジア大陸部＝すなわち今日の中国の漢人地域における豊富な物産に支えられて成立した専制権力が皇帝を名乗り、自ら直接支配する王朝の範囲のみならず、周辺諸国・地域、さらには潜在的に全ての人類を含めて「天下」を設定し、その「天下」全体に対して自らの文化的優越を主張するとともに安定をもたらそうとする点にある。

もちろん、中国文明を中心とした「天下」のシステムを単純に指し示すことへの批判は、内陸アジア史の立場を中心に根強い。何故なら、北京と内陸アジア諸集団との関係においては、「天下」のシステムではなく個別の宗教・文化的文脈(チベット仏教やイスラーム)が作用していたからである。

とはいえ、突き詰めて考えると、内陸アジアの騎馬民族それぞれの立場と、中華世界の皇帝あるいは「天下」の論理は必ずしも衝突するものではないという現象も見逃すことは出来ない。双方が独自に解釈する余地を残していたためである。

しかし19世紀後半以後、かつての「天下」の中心たる中国王朝をも呑み込むかたちで近代国家主権・近代国際関係が普及した結果、相互に全く別の思惑や秩序意識を持っていた主体どうしの、良く言えば緩やかで、悪く言えば曖昧な共存は困難になったと考えられる。何故なら、近代国家主権の論理においては国境線と国民の範囲が明確に区切られ、その範囲に排他的かつ特定のイデオロギーで武装した国家主権が貫徹するからである。

以上のように、従来の研究では、既存の地域的伝統秩序と近代国家主権・近代国際関係との軋轢については深められ、しばしば「それは西洋近代によって変容させられたものだ」という議論がなされてきた。しかし一方で、他でもなく非西洋諸国が西洋近代的な国家主権・国際関係を導入し、それに積極的に適応してきたこと自体の重みも無視できないだろう。だからこそ、非西洋諸国が近代国家主権をあたかも崇拜するかの如く死守するという傾向も存在する。中国が「核心利益」と称して、国家主権の範囲と見定めた土地を防衛・回復しようとし、その土地への外国の関与や関心を排除しようとするのは、その典型的なあらわれである。

そこで今強く問われるべきは、

(1) 西洋中心的主権国家システムとそれ

を踏まえた世界像は、どの程度、どのように非西洋諸国、たとえば中国に受容されているのか。あるいは西洋/非西洋という二分法を措定することは最早あまり意味がないほどに「普遍」化、あるいは深く共有されているのか。

- (2) そして、このような受容は今後も強固に存続するのか。変わるとすればどのような部分がどう変わって行くのか。それは果たして「伝統の復活」なのか、それともナショナリズムの語りを通じて「発見・想像された伝統」と反応した全く異なる次元への変化なのか。

……という問題であろう。そこで本研究は、このような問いを現在、そして歴史世界へと遡ることによって、東アジア国際関係の過去・現在・未来を貫く視座を提示することを目指すのみならず、西洋・非西洋諸地域を問わず共通に存在する《主権・伝統・変容》の関係を考える上での比較の視座を提供しようとしてきた。

3. 研究の方法

西洋近代に由来する規範・秩序の東アジア等非西欧への伝播と現地での消化、そして体制の論理や一般民衆の意識レベルにおける定着（及び反発）というテーマは、それ自身が思想課題として魅力的なものであり、政治外交史はもちろんのこと思想史的・法制史的・文化史的テーマが複合した総合文明史論としての深みを備えている。しかし、それは同時にややもすると総花的で散漫なものになってしまう可能性も否定できない。いっぽう、極めて大きな問題を扱い問いかけるとしても、ケーススタディは自ずとひとつの国・地域を中心としたものとなりやすく、他地域の研究にも広く開かれた比較の可能性を意識しなければならぬだろう。

そこで研究代表者（平野）は、研究分担者（大沼）との意見交換を踏まえて、

Buzan and Little, *International Systems in World History* (OUP, 2000)

Michael Geyer, Charles Bright, “World History in a Global Age”

American Historical Review, Volume 100, Issue. 4 (Oct., 1995), pp.1034-1060

といった研究に見られる方法を、同様の関心を持つ他の東アジア地域研究者と関連領域研究者とともに研究会を催して検討し、かつ諸地域をめぐる研究動向や問題意識について討論し合うことを通じて、問題意識や論じ方について洗練を図って行くことにした。とりわけ、前近代における文明・宗教面での一大中心地にして、現代の国際政治においても急速に存在感を高めているもう一つの国家であるインドの視点を加えることによって、東アジアの国際関係ならびに西洋近代との関係が世界史的に見てもどのような特質や問題点を持っているのかを探ることにした。

平成 25 年度以降は、上記の目的意識に即した研究会を定期的に催すのみならず、具体的に資料を渉猟し研究成果を論文（単著）として世に問う作業を進めて行くことにした。また研究代表者（平野）、研究分担者（大沼）はともに新聞・雑誌・Web 記事を通じて知見を少しずつ社会に還元する機会がしばしばあることから、その機会において多くの人が「世界の中の東アジア」とその近代史、そして諸文明・文化の交錯についてより理解を深めることが出来るよう努めた。

4. 研究成果

当研究が発足した当初から強い問題意識として抱いていた、伝統的な文明によって異なる国際秩序像の重層・共存・摩擦という問題は、研究がスタートした平成24年度以後過熱し、広い国際的注目と懸念を呼ぶことになった。海域をめぐる紛争に対する中国の立場は、尖閣問題にせよ、ベトナムやフィリピンとの島嶼をめぐる争いにせよ、単に島嶼の所屬を争うものであるだけでなく、そもそも近代国際関係の歴史や現実の国際秩序そのものへの不満に基づいていることが、彼らの言論と行動から明らかになったためである。また類似の問題が、ウクライナをめぐるロシアと欧米の軋轢として現れているし、ISIS（イラクとシヤームのイスラーム国）のカリフ制宣言によるシャリーア的秩序の構築とそれにともなう悲劇の数々も、近代国際秩序と伝統思想のはざままで流動化が加速していることを象徴している。さらに、よりミクロなレベルに着目すると、一見すると順調な経済発展の軌道に乗っているような国々、たとえばアジア諸地域において、一方では積年の民族問題が緩和されることでさらなる発展の展望が開けているかのように見えながら、その内部では伝統や宗教を踏まえた過激な思想・価値観が生じ、一定のライン（領域的ではなく価値の面で）を引いた外側の他者を排除する動きも顕在化している。研究分担者である中溝和弥氏が専門として扱っているインドのコミュナルな問題（とりわけムスリムに対する排除）は、国家形成・発展の名のもとで線引きが行われて来た歴史の負の遺産とも呼ぶべきものである。

そこで研究代表者及び分担者は、非西洋、さらには欧州の中でも「周辺」的位置にあった中欧以東のスラブ世界の動向にも注意しながら、伝統秩序と近代秩序の反応のあり方に関する精緻な比較研究の必要性を痛感し、視角の共有ならびに研究の深化を図ってきた。

初年度である平成24年度は、研究方法について述べた前項の通り、アジアのみならず世界各地における同様の歴史的問題に対して深い関心を寄せる研究者に広く呼びかけ、《地域》とその歴史・近代文明との関係を如何に概念化し記述するのかという根源的な問題について、共通テキストを踏み台として討論を重ねるという形式で、研究会を2回開催した

(2012年9月10日、於東京大学。共通テキストは羽田正『新しい世界史へ 地球市民のための構想』及び、2013年4月6日、於明治大学。共通テキストとして、大沼保昭『A Transcivilizational Perspective on International Law』。なお、後者が2013年度にずれ込んだのは、春期休暇中の参加者の日程調整が難しかったためである)。

上記研究会での問題提起・討論を通じて浮き彫りになったのは、そもそも近代国際関係・国際法秩序・歴史記述の都合上作り出された近代国家、それらの集合体としての「地域」、議論の前提としての歴史的「秩序」といったものが権力や学問の作為として描かれ、現実の多様極まりない諸相を反映していないという問題である。ところが一方で、描かれて「発見」された側の「地域」「秩序」の側が、強者への対抗手段として近代国家と「地域」を実体化させようと欲する動きが不断に発生し内面化されるという問題も指摘された。こうして、歴史記述上の作為と実体の境界線が極めて曖昧であるという知的難問を自覚しながら、平成 25 年度さらなる研究を進めるという方向性が共有された。

そして上記の成果を踏まえ、さらに幅広い地域の研究者に研究視角の呼びかけを行った結果、平成 24 末からは新たな基盤(A)研究「多極化する世界への文際歴史的探求」(代表・大沼保昭)をスタートさせるに至り、年に3回程度の研究集会を中心として活発な意見交換と研究成果の蓄積が進んでいるとことである。当基盤(C)研究の研究代表者及び分担者はすべて、この基盤(A)研究にも申請時点から積極的に関与しているため、平成 25 年度以後の当研究は大型科研のサブ研究としての意味合いを持ちつつ持続することになった。

そこで研究代表者(平野)は、当基盤(C)研究で得られた認識方法・知見を活かして、東アジアの外交・歴史問題の背後にある中国近現代史と西洋・日本との複雑な関係について、社会一般に対して明快に示す単著『反日』中国の文明史』を出版した。本書はそれなりに注目を集めて版を重ね、関連してメディアに出演したり政治・経済系の雑誌で紹介されるなど、社会一般への還元という点でそれなりの成果を挙げることが出来たと考える。しかし、当研究及びテーマそのものが専門外からみて難解であることも否定出来ず、とは言ってもこの種の問題を社会一般で広く共有することが重要であることには変わりはないことから、具体的な論じ方という点において新たな課題を痛感しているところである。今後さらに追加で、文明・秩序重層的な視点から、中国の少数民族問題・辺境問題を論じる単著を準備・執筆して行きたいと考えているが、時間に制約されて作業が思うように進捗しない点は自己批判せざるを得ない。

また、研究分担者のうち茂木教授は、研究代表者と共通の関心に基づき、中国中心の伝

統秩序の変容に関して詳細な論考を重ねたほか、新田教授は中国中心の秩序が解体されたあとの朝鮮半島を取りまく政治外交史を新たに発見された史料から照射し直す作業を進めてきた。また中溝准教授は専門のインド社会と中国・東アジア社会との構造の違いに注目しつつ、インド政治社会史に関する豊富な成果を挙げることができた。豊富な学会報告や概説の執筆を通じて、インドに対して高まりつつある社会的関心の大きな部分に応えているといえよう。

これに対し、大沼・渡辺両教授は、健康面や公務の多忙などにより、研究成果は微少にとどまったが、当研究をめぐる極めて強い問題意識は持続している。

総じて3年間にわたる本研究は、研究代表・分担者の間の強い問題意識共有を軸に、さらなる大型科研へと発展させ、その成果の一部を社会へ還元することが出来たという点で成果があったものの、時間などの制約によって成果の発表を尽くすことが出来ていないのは遺憾であった。引き続き、変動著しい国際秩序と各国それぞれの問題の関係をどのように論じれば良いのかという、言わば方法論上のひな形を提供するため、思考を積み重ねて行くことを課題としたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

茂木敏夫、『海国図志』成立の背景---中国社会の変動と経世論、洋学史学会研究年報『洋学』、第19・20巻合併号、査読無、2015年、147-165頁。

茂木敏夫、近代以降の東アジアにおける地域秩序の変容と中国、ワセダアジアレビュー、第16号、査読無、2014年、42-46頁。

茂木敏夫、中華世界秩序論の新段階、東京女子大学紀要『論集』、第65巻1号、査読無、2014年、46-61頁。

平野聡、世界史の中の満洲国、月刊歴史読本・満洲国を動かした謎の人脈、2013年8月号、査読無、2013年、54-59頁。

大沼保昭、慰安婦問題---日本がいま語るべきこと、潮、645号(2013年8月号)、査読無、2013年、92-97頁。

茂木敏夫、伝統的秩序をどう踏まえるか---東アジア新秩序の構想をめぐって、国際問題、第623号(2013年7・8月合併号)、査読無、2013年、42-52頁。

茂木敏夫、『海国図志』成立の背景---十八-十九世紀中国の社会変動と経世論、論集(東京女子大学紀要)、第64巻1号、査読有、2013年、87-102頁。

大沼保昭、「保護する責任」と「保護される責任」、世界法年報、第31号、査読無、2012年、7-41頁。

中溝和弥、弱者と民主主義---インド民主主義60年の実践、日本比較政治学会年報第14号『現代民主主義の再検討』、査読有、

2012年、221-245頁。

渡辺浩、儒教と福沢諭吉、福沢諭吉年鑑、第39号、査読無、2012年、91-116頁。

〔学会発表〕(計25件)

平野聡、ポスト冷戦期の「中国夢」がもたらす内外の摩擦---救いなき少数民族と香港、科研費基盤研究(A)「多極化する世界への文際的歴史像の探求」研究会、2014年12月20日、ホテルサンルートプラザ新宿(東京都渋谷区)

中瀧和弥、ネーションと宗教：南アジアにおける脱植民地化、科研費基盤研究(A)「多極化する世界への文際的歴史像の探求」研究会、2014年12月20日、ホテルサンルートプラザ新宿(東京都渋谷区)

平野聡、尖閣問題・史料再検討---中国側主張の問題点を読み解く、日本国際問題研究所「各国の領土をめぐる問題」「各国の歴史認識と領土をめぐる問題」合同研究会、2014年12月3日、日本国際問題研究所(東京都港区)

中瀧和弥、経済成長と宗教ナショナリズム：2014年総選挙からみたインド社会、2014年度アジア政経学会西日本大会、2014年11月29日、京都大学(京都市左京区)

中瀧和弥、インド民主主義の危機---多重派支配の恐怖、日本南アジア学会市民講座「グローバル化する世界の中のインド」、2014年10月11日、東京大学(東京都文京区)

平野聡、アジアにおける近代国家・ナショナリズム形成「揺籃期」としての18世紀史、科研費基盤研究(A)「多極化する世界への文際的歴史像の探求」研究会、2014年9月27日、下高井戸区民集会所(東京都世田谷区)

中瀧和弥、War on Terror and Domestic Politics : The Case of India、Asia Economic Community Forum、2014年9月19日、Grand Hyatt Incheon(韓国仁川市)

茂木敏夫、前近代の中華秩序及其近現代の展開---思考「中華」的可能性と局限、台湾大学人文高等研究院・東亞視域中的「中国・中華」意識国際学術研究会、2014年7月24日、国立台湾大学(台湾台北市)

中瀧和弥、村人の2014年インド総選挙---何が争われたのか？、科研費基盤研究(A)「中国・インド大国化とアジア」研究会、2014年6月15日、立教大学(東京都豊島区)

中瀧和弥、抵抗の作法---インドにおける運動と議会、科研費基盤研究(A)「中国抗議型維権活動拡大のメカニズム」2014年度研究会、2014年5月17日、早稲田大学(東京都新宿区)

茂木敏夫、戦後体制の東アジア的文脈---中国から考える、戦後体制研究会、2014

年1月21日、学士会館(東京都千代田区) 茂木敏夫、普遍と個別---近現代東アジアにおける秩序構想の語り方、近代日本政治外交史研究会第12回研究会、2013年12月21日、大東文化大学信濃町校舎(東京都新宿区)

中瀧和弥、Secularism and Federal Space---The Study of Religions Conflicts in India、INDAS International Symposium "In Search of Well-being Genealogies of Religion and Politics in India、2013年12月15日、龍谷大学(京都府京都市)

中瀧和弥、宗教暴動と中央・州関係、科研費基盤研究(A)「グローバル化の中のインド州政治：開発・環境・暴力をめぐる全28州の比較分析」研究会、2013年11月9日、長崎県立大学(長崎県佐世保市)

中瀧和弥、インド民主主義の現在---下克上とその後の展開、中央大学政策文化総合研究所「激動するインドの内政と外交」ワークショップ、2013年7月12日、中央大学(東京都八王子市)

中瀧和弥、暴力と市民社会---インド・グジャラート州の事例、アジア政経学会2013年度全国大会、2013年6月16日、立教大学(東京都豊島区)

平野聡、大和魂・中国魂・西藏魂？---中国の民族問題における近代日本の陰影、日台アジア未来フォーラム「近代日本思想の展開と東アジアの政治」、2013年5月31日、国立台湾大学(台湾台北市)

渡辺浩、Nation・民主・自由：日本を例として、日台アジア未来フォーラム「近代日本思想の展開と東アジアの政治」、2013年5月31日、国立台湾大学(台湾台北市)

茂木敏夫、中華世界秩序論与其新階段、華東師範大学ECNU-UBC現代中国与世界聯合研究中心「中華民族的国族形成与認同」学術討論会、2013年3月9日、華東師範大学(中国上海市)

中瀧和弥、選挙と農村社会---インド・ビハール州の事例、科学研究費基盤(A)広域アジアの市民社会構築とその国際政治的課題・京都大学地域研究総合情報センター共催シンポジウム「アジアの市民社会と国家の間---民主主義は有効か」、2013年1月13日、京都大学(京都府京都市)

① 中瀧和弥、The Inclusion and Exclusion of Minorities in India: The Dilemma between Democracy and a Multiethnic Society、International Conference: Looking beyond State; Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India、2012年12月22日、Japfu Christian Colledge (Kohima, India)

② 茂木敏夫、東アジアにおける朝貢秩序の実態とその語り方、(韓国)東北アジア歴史財団・東アジア研究フォーラム国際学術会議「東アジア文化の中の中国」、2012年

- 11月2日、延世大学(韓国ソウル特別市)
- ②③ 中溝和弥、Peripheries Creating the Indian Nation---Border and Minority Questions Revisited、International Symposium: from Empire to Regional Power, between State and Non-State、2012年7月5日、北海道大学(北海道札幌市)
- ②④ 中溝和弥、Minority Question in India ---The Case of Gujarat---、Discussing Contemporary India: Politics and International Relations from Asian and Global Perspectives、KINDAS & RINDAS International Symposium、2012年6月29日、京都大学(京都府京都市)
- ②⑤ 平野聡、発展と「安全」の乖離: アジア新興国における社会不安・アイデンティティ・政治体制---中国の事例を中心に、比較政治学会、2012年6月24日、日本大学法学部(東京都千代田区)

[図書](計15件)

中溝和弥、グローバル化と国内政治---グジャラート大虐殺と「テロとの戦い」(シリーズ現代インド『深化するデモクラシー』)、東京大学出版会、2015年、219-243頁。

中溝和弥・石坂晋也、民主政治と社会運動---制度と運動のダイナミズム(シリーズ現代インド『多様性社会の挑戦』)、東京大学出版会、2015年、305-332頁。

中溝和弥、暴力革命の将来---インドにおけるナクサライト運動と議会政治(『インドの社会運動と民主主義---変革を求める人びと』)、昭和堂、2015年、164-199頁。

平野聡、「反日」中国の文明史、筑摩書房、2014年、270頁。

平野聡、「中華民族」の国家と少数民族問題(『社会人のための現代中国講義』)、東京大学出版会、2014年、30-57頁。

大沼保昭、戦後責任(内海愛子・加藤陽子・田中宏との共著)、岩波書店、2014年、271頁。

新田一郎、歴史的考察--「法の実現はお上の仕事」か(『岩波講座 現代法の動態 2 法の実現手法』)岩波書店、2014年、29-50頁。

茂木敏夫、華夷思想とアジア主義(『アジア主義思想と現代』)、慶應義塾大学出版会、2014年、3-39頁。

大沼保昭、Multi-Civilizational International Law in the Multi Centric 21st Century World: Transportation of West Centric to Global International Law as Seen from a Trans-Civilizational Perspective (Pierre-Marie Dupuy and Vincent Chetail eds., The Roots of International Law)、Martius Nijhoff Publishers、2014、599-640頁。

中溝和弥、Political Change in the

Bihar---Riots and Emergence of Democratic Revolution (Lall, Sunita and Shaibal Gupta ed, Resurrection of the State A Saga of Bihar---Essays in Memory of Paniya Ghosh)、Manak Publication、2013、69-108頁。

平野聡、上有政策・下有対策---地方と中央の微妙な力学(『はじめて出会う中国』)、有斐閣、2013年

平野聡、多民族統治の困難---「中華民族」の理想と現実(『はじめて出会う中国』)、有斐閣、2013年。

大沼保昭、International Law and Power in the Multipolar and Multicivilizational World of the Twenty-first Century (R.Falketal eds., Legality and Legitimacy in Global Affairs)、Oxford University Press、2012年、149-197頁

茂木敏夫、Modes of Narrating the History of Sino-Japanese Relations: the Latter Half of the Nineteenth Century (Trans. Matthew Fraleigh) (Daqing Yang, Jie Liu, Hiroshi Mitani, and Andrew Gordon ed, Toward a History Beyond Borders)、Harvard University Press、2012年、20-52頁。

新田一郎、法と歴史認識の展開(『日本思想史講座 2 中世』)、ペリかん社、2012年、115-146頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

平野 聡 (HIRANO, Satoshi)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 0 0 3 6 1 4 6 0

(2)研究分担者

大沼 保昭 (OONUMA, Yasuaki)
明治大学・法学部・特任教授
研究者番号: 5 0 0 0 9 8 2 5

渡辺 浩 (WATANABE, Hiroshi)
法政大学・法学部・教授
研究者番号: 1 0 0 0 9 8 2 1

新田 一郎 (NITTA, Ichirou)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 4 0 2 0 8 2 5 2

茂木 敏夫 (MOTEGI, Toshio)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号: 1 0 2 3 9 5 7 7

中溝 和弥 (NAKAMIZO, Kazuya)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究
研究科・准教授
研究者番号: 9 0 5 9 6 7 9 3